

# 東京の教育

復刊第二十七号 東京都教師会発行

(事務局) 横浜市都筑区茅ヶ崎南四ノ十四ノ一ノ三二〇

## 中学校勤務から定時制高校勤務へ

松井 潔

三年前、三十五年間勤務してきた中学校から、単位制の定時制高校へと異動した。学校は、新潟市中央区に所在し、新潟駅から徒歩二十分のところにある。

「午前部」と「夜間部」があり、私は、「午前部」の勤務であり、出退勤の時刻は、全日制高校と変わらない。教科は、理科。校務分掌は、二次次主任、教務部。部活動は、演劇部主顧問である。

定時制高校といえば、就労と学業の両立というイメージがあるが、最近では、全国的にも、人間関係の悩みや、身体的・精神的事情から定時制高校を選ぶ生徒が多く、当校も同じ傾向が言える。そして、まずは高校卒業資格が欲しいという理由で受験するようである。生徒は、午後の授業を履修し、単位を修得すれば、三年間で卒業することができる。実際に、生徒の八割程は、三年で卒業する。そのため、中学校の生徒・保護者の進路選択にあたり、「定時制」ということで敬遠されることはなく、毎年受験者は定員を超えている。

授業は「化学」「化学基礎」を担当している。学力差が大きい、優秀な生徒がそうで

ない生徒を蔑んだり、逆の例で優秀な生徒の足を引っ張ったりするということはない。切磋琢磨の雰囲気はないが、和気藹々とした雰囲気、授業はつつがなく展開されている。ただ、授業の水準や考査の難易度については、どこに照準を合わせればいいのか苦心している。極端な例では、同じ授業教室の中で、百点の生徒と零点の生徒が在籍したこともあった。

校則は、「生徒の心得」として存在しているが、一般常識程度のものである。就業している生徒や、成人している生徒がいることから、服装や頭髪も自由であり、個人の自覚と良識に任されている。当然茶髪、つけ爪、ピアスの生徒も散見されるが、大多数は、校則のある学校の生徒と同じ水準である。清楚な身なりをしている生徒が奇抜な身なりの生徒を非難・批判・軽蔑することもなく、真似をしようとするものもない。異質な者たちが否定も肯定もせず共存している状態である。他人のことには関知せずという現代若者気質かもしれない。

服装・頭髪以外でも学力や家庭環境、生活行動、価値観等の異なる生徒同士が集まっている中で、穏やかで友好的な生徒集団である。

奨学金の担当をしたときである。生徒が提

出した申請書類の不備を指摘した際、家の人にもよくみてもらうように伝えたところ、自分の両親は病気で既に他界していることだった。私はすぐに謝ったが、逆に私の気持ちを気遣い、庇うようにして、気にしないで欲しいと笑顔で伝えられたときは、人間的に彼女の方が上であると頭が下がった。受験の成功と人生の幸福を祈らずにはいられなかった。

定時制高校の生徒は、いろいろな境遇の生徒がおり、境遇に負けずに果敢に生きている生徒も多く、生徒から教わる場面に時々遭遇する。

顧問を務めている演劇部は、「看板部」と評されており、積極的な活動をしている。部員も多彩な顔ぶれである。私より五歳ほど年上の生徒、県内屈指の進学校から編入してきた生徒、病気がちの生徒等多様である。年齢差、学力差、性格の違いがあるが、衝突することなく、発表会に向けて、音響・照明・役者が三位一体となって、温かな雰囲気練習を重ねている。本番では、突発的なアクシデントが起こるが、騒いだり慌てたりすることなく、瞬時に、目配せをし、次善の策を講じ、観客には失敗を気づかれないように進める芸当もこなせるようになった。先月の文化祭の発表会では、準主役の生徒が急に欠席をしたが、急遽役を入れ替えて上演は成功裏に終えることができた。保護者が演劇発表を見観劇し、ステージで堂々と演じている姿を見

て、「中学校時代は教室には入れなかった姿を思い出し、あれが本当に我が子かと目を疑った」という話を聞き、普段の苦勞が報われた。

生徒指導においては、大きな問題はさておき、小さいはずらやトラブルが皆無ではあり、保護者からのクレームも皆無である。生徒も保護者も年齢や経験を重ねて成長した証だと思ふ。義務教育勤務の長い私からすれば、このところが義務教育と高等教育の職場環境の大きな差違であると思つた。

卒業生の進路は、大学・短大約一割、専修学校・各種学校等約四割、就職約五割と、全国の時制の平均値とほぼ同じ数値である。高校生活で再起をめざして入学した生徒が多く多くの生徒が、目標や目的を果たして卒業していく。手前味噌であるが、新潟市内の高校の中で最も感動する卒業式と評されるのも頷ける。

高等学校勤務で、「自業自得」「自己責任」をよく聞く。確かにその通りで、義務教育は、常に、転ばぬように、失敗させぬよう過剰になっていると思ふ。しかし、「自己責任」を指導の手抜きを隠れ蓑にしてはいけないと思ふ。生徒の人生の危険予知と警告は、教師の重要な職務と考へる。

「定時制教育は教育の原点だ」という人もいた。三十五年間の教師経験を試されているように思ふ。毎日が刺激的である。

余談であるが、本校は、教員数は五十五人

ほどであるが、高教組組合員は一人しかいない。因みに新潟県全体では高教組の組織率は二割を切っているという。

(新潟市立明鏡高等学校)(会員)

### ある卒業生との対話

#### —ウクライナ問答—

黒羽 秀夫

先日(二〇二三年十一月)卒業生のS君と出会つた。そのとき彼から久しぶりに、私の地政学の話を知りたいと頼まれたので、彼に話をしたことを以前記した。

彼が在学中(二〇一四年)、ロシアのクリミア併合という出来事が起こり、学生達の要請でこの件につき解説をしたことがあつたのだ。

私はこの問題を理解する参考書として次の二冊をまず提示した。

○黒川祐次著『物語 ウクライナの歴史』

中公新書(二〇〇二年刊)

○吉田一郎著『国マニア』ちくま文庫(二〇一〇年刊)(そのときの解説は略す)

この解説後、彼はこの二冊を読み私に、質問をしてきた生徒であつた。彼は『国マニア』の第二章(国の中で独立するもうひとつの国)の中でクリミア自治共和国(旧ソ連の民族と政治問題の縮図となつた黒海の半島)に注目し、私にこう尋ねたのであつた。

「この地域は、地政学上の緩衝地帯(バッファゾーン)である。しかしそのバランス

が崩れるとランドパワーとシーパワーのぶつかる衝突地帯(クラッシュゾーン)になり、仲介がうまくいかない、ここから世界的な地政学リスク(例えば小麦)も発生する。この様に先生はいわれた。この問題をもう少し詳しく説明してほしい」と。この様な質問を彼がしたことを思い出したのである。

確かそのときにクリミア戦争(一八五三—一八五六年)をグレートゲームとの関連(ロシアのクリミア併合のルーツの一環)で説明したこと等も確りと思ひ出した。

要はS君、久しぶりにこれらの話をそれこそ復習として又伺いたいとのことであつた。

幸い私が読破中の本(飛田雅則著『資源の世界地図』日経文庫(二〇二三年刊))をみせて、関連箇所を読んでもらった。(第4章ロシアは生き残れるかの3・ロシアに対抗する国々『ウクライナ問題で暗雲』、4・したたかな中国に苦慮『グレートゲーム再び』等を)それこそ復習の教材として活用した。そしてクリミア半島も含めた戦域(シアター)の進展は、衝突地帯の注目すべき現況なのであるということ、理解してもらつた。さらに彼より、この問題に関する読んでおくべき(できれば小説でも構わない)本はありますか?との問い。タイムリーにも彼と会う直前に古書店で購入し知人に寄贈しようと思つていた本を、お茶代と本とのパートナーということにして話を終えた。それではその本(濱嘉之著『天空の魔手 警視庁公安部 片野坂彰 第五弾』文

春文庫（二〇二三年刊）の三三七〜三三八頁より引用してみよう。

「『お前は、今回のウクライナ侵攻を、日本の防衛と絡めてどう考えているんだ？』」

「今回、ロシアというよりもプーチンが、日本も狙おうと考えていたことが明らかになっていきます。ウクライナ軍が予想をはるかに上回る交戦をしてくれたおかげで、日本攻撃がなくなつたのです。これには感謝するしかないでしょう。極東に回す軍隊がないのですからね」

「俺もその話はある筋から聞いていたんだが、プー太郎は本気だったのか？」

「本気だったと思いますよ。ガスプロムのサハリン開発に日本資本が必要だったことが救いになっただけのことです。…」

私もある軍事研究家の方より「日本へ侵攻用の軍隊をウクライナへ転用した」という様に聞いております。因みにこの問題については、もうひとり、やはり卒業生の方に解説をしております、納得してもらいました。

「緩衝（地帯）のバランスが崩れると衝突（地帯）になり、又地政学リスクも生ずると、この様に理解しておきます」。S君のこの一言をもつて結びとする。（会員）

戦前の中学国語の教科書を読む（二十一）

「次の文章は、八波則吉編『現代國語讀本 卷三』（昭和十年修正七版）（現在の中学二年前期相当）所収のものである。

漢字、送り仮名は原文通り、読み仮名は適宜新たに加へた。」

自修 嘉納治五郎

自修の必要なことは昔も今も同じである。

「ローマ盛衰史」の著者ギッポンは、修養に關して一の的確な教訓を遺して居る。それは、「何人も二つの教育を要する。一つは他から受けるもので、一つは自ら與へるものである。さうして、後者は前者よりも一層緊要である。」といふのである。實に古來學問の道に入つた者は、其の學問に就いて他人から教を受けると同時に、己も亦屹々として自ら修め、そして、其の到達點の最高最遠であることを期したのであつた。蓋し他から注入されたものは我が有となることが割合に少いが、自ら修め自ら努力して得たものは自己の有となり、眞正に精神の榮養となるからである。禪家の語に、「門より入るものは是家珍にあらず、須らく自己の胸底より流出して、天を蓋ひ地を掩ふべし。」とあるのは面白い。

自修は印象を明確にし、知識を能力に變ずる最良の方法である。これが卑近の例を挙げると、數學を學ぶに當つて、毎日自分で練習せず、又豫め考量もせず、單に先生の説明ばかりを聽いて居るとしたならば、其の結果はどうであらう。其の説明を聽いた部分だけは



嘉納治五郎

分つたにしても、いざ應用問題を解かうとする場合には、手も足も出ないであらう。外國語を習ふに際しても亦同様である。自分で字書も引かず、又自分で文を作るなどのこともせず、單に教室内の講義や指示ばかりに頼つて居るとしたならば、其の講義され指示された事項だけは假に記憶することが出来るにしても、教科書以外の書物を読みこなす力は養ひ難い。其の他、地理、歴史、物理、博物、又は有らゆる専門學科の學習に於ても同じことである。若し此等の學科の授業を受ける前と後とに、自分で前後の連絡や因果の關係や事實の輕重などを考へなければ、新に學得した知識は、既に得て居る知識と連鎖することが出来ないから、頭腦の裡に於て全く孤立し、記憶も鞏固にならなければ、活用も自在にならない。斯ういふ譯であるから、經驗によつて自修の價値を知悉した者は、常に自修を以て殆ど己の生命のやうに考へて、たとひ寸陰でも之を徒費しないで、直ちに自修に宛てるのである。茲に自修とは、かの豫習・復習の兩者を自己の全力を緊張して仕遂げることをいふのである。隨つて自修が各學科を通じて必要なことは言ふまでもない。かの數學に解式書を用ひたり、語學に獨案内を用ひたりするなど、凡べて他に依頼するのは自修の本旨を没却するもので、自修の名はあつても効力は甚だ薄く、其の實は依頼心の變形といふべきものである。

自修の効力は、啻に學校に於て授けられる

學科の習得に對して補助となるばかりではなく、それが鞏固な意志によつて持續して行はれ、十分に學校に於ける學習の代用をもすることが出来るものである。かの米國獨立史上に不朽の名を留めて居るフランクリンの幼時の教育はどうであつたか。彼は僅々二年ほどの學校教育を受けたばかりである。又米國に於て殘忍暴戾な奴隸制度の廢止に盡力して、長へに人道の上に光を添へたリンカーンは、僅に一年足らずの外は學校教育を受けなかつたのである。又今日まで德行の光の輝いて居る二宮尊徳や、碩学一世に秀でてゐた新井白石なども、殆ど他人から何等の教育も受けず、少壯時代に於て専ら自修の功を積んであのやうになつたのである。蘭學が始めて我が國に傳來した頃は、我が國の學者は始から一字一字引を引いて見、想像に想像、熟考に熟考を重ねて、漸く大體の意味を察知したといふことである。更に手近く余が實際に目撃した事實にもさういふことがある。

先年、余の家に十七八歳の青年が來て寄寓することになつた。この青年の小さい頃には、まだ義務教育も十分に勵行されてゐなかつたので、僅に假名を讀み得るだけの學力しかなかつたが、余の家に寄寓してから、奮然として一通りの學力を得ようといふ心掛け、余が與へた假名付の書



フランクリン



リンカーン

て一通りの學力を得ようといふ心掛け、余が與へた假名付の書

物で漢字を覚え、一心不乱に熟讀を重ねて、たうとう相當多數の漢字を習得し、斯くて新聞紙などはすら／＼と讀み、日常の手紙の往復にも何等の差支を感じないやうになつたので、本人の満足は言ふに及ばず、余も世話甲斐のあつたことを甚だ喜んだのであつた。自修の効力は此のやうに甚大であるけれども、又不利益が伴はないでもない。總じて自修だけで一通り學藝に熟達しようとするには、極めて多くの時間と努力とを要し、而も見聞は自ら狹隘になることを免れないのである。この點から言ふと、他人に就いて學ぶことは多くの利益がある。即ち僅少の時間に僅少の勞力で多くの事項を容易く習得することが出来るから、吾人は自修を怠らなかつたと同時に、學校に於ける學習を輕視してはならぬ。

(青年修養訓)

原註  
嘉納治五郎 兵庫縣の人。萬延元年生。前東京高等師範學校長。貴族院議員。  
ギッボン 英國の歴史學者(1737-1794)  
フランクリン 米國の政治家・學者(1706-1790)  
リンカーン アメリカ合衆國第十六代の大統領(1809-1865)  
二宮尊徳 名は金次郎。相模國(神奈川縣)の人。江戸時代後期の經濟學者。安政三年(二五二六)歿。年七十。  
新井白石 名は君美。江戸の人。江戸時代前期の政治家・學者。享保十年(二三八五)歿。

年六十九。  
(編集註 外國人の生歿年は西曆、日本人の歿年は皇紀で示されている)

著書紹介

『大和魂・大和心の語誌的研究』(錦正社刊)。

著者は前日本教師会会長・京都産業大学名誉教授若井勲先生。

定価 五千五百円(税込)。

本書は、大和魂・大和心という言葉をめぐる、国語学・国文学を融合させ、日本人の心の在り方、働き方を明らかにしたものである。

お願い

一、会費納入

年額 二千元

口座 「みずほ銀行」港北ニュータウン支店

店番号 743 普通預金 1330150

二、原稿募集

一、原稿募集

「東京の教育」への会員の皆様の「」投稿を  
お待ちしております。

三千字程度まで。仮名遣いは統一して下さい。

写真や図版も対応します。

送り先は題字下にあります。また、メールの送り先は次の通りです。

事務局アドレス(佐藤)

komasato@juno.ocn.ne.jp